

J. F. OBERLIN

桜美林大学

環境報告書



2017年度版

目次

学長メッセージ ————— 2

1 桜美林大学のエコキャンパスに向けた現状と取組

桜美林大学エコマップ2016 ————— 3

INPUT(資源の消費) とOUTOPUT(環境への排出) ————— 5

町田キャンパスのごみの新分別2016年10月より試行、
2017年4月より本格実施 ————— 7

2 桜美林大学での環境の学び

ECO-TOPプログラム、グリーン・キャンパス・プログラム ————— 9

ECO-TOPプログラム 東京都庁インタビュー ————— 10

ECO-TOPプログラム 在校生及び卒業生の声 ————— 11

学生サークルの活動 ————— 12

サービスラーニング科目 ————— 13

桜美林大学のゼミに聞いた！～私たちにできるSDGsへの貢献～ 15

3 桜美林大学の環境に関する社会貢献

小学生向け公開イベント、高校生のための環境科学講座 ————— 17

境川クリーンアップ作戦、環境研究所公開講演会 ————— 18

環境報告書を読んで ————— 19

編集委員会の活動・編集後記 ————— 21

桜美林大学の概要・環境報告書基礎的事項

環境報告書について

- 環境報告書の目的**：桜美林大学の環境保全に関する取組を在学生、教職員、桜美林学園と関わりのある全ての方々に報告するものです。
- 報告対象組織**：桜美林大学のうち町田キャンパス
- 報告対象期間**：2016年度の環境負荷データや環境保全活動を対象としています。発行が2017年度のため、「2017年度版」としました。なお、インタビューなど、一部に2017年度半ばまでの情報を含みます。
- 製作・編集**：桜美林大学環境研究所が桜美林学園施設・管理部ほか関係部署の協力を得て製作しました。公募による5名の学生編集委員が編集に参加しました。学生主体の活動や社会貢献活動は、学生編集委員が情報を収集し、インタビューを依頼して受諾いただいたもの等を掲載しています。したがって、桜美林大学の全ての活動を網羅しているわけではありません。

学生数		教職員数		職員数	
学群・学部	8958	専任	262	専任	148
大学院	327	非常勤	592	非常勤	123
合計	9285	合計	854	合計	271

(2016年5月1日現在)



学長ご挨拶

2017年度版桜美林大学環境報告書を発行いたします。本環境報告書では、2016年度の本学のエコ・キャンパスの現状や大学・学生の取組をご紹介します。

2016年度の大きな取組は、ごみの分別をより適切なものに変更したことです。2016年10月に学生ラウンジで試行を開始し、2017年4月から町田キャンパスとプラネット淵野辺キャンパスで完全実施しました。ごみは、毎日どうしても出るものです。ごみを正しく分別することを通じて、自分がどのようなごみを出しているのかに気づき、ごみとなる製品や食べものを作った人、運んだ人、そのために使われるエネルギー、そのごみがどこでどのように処理されるのかなどを想像して、教員、職員、学生一人一人が地球環境に思いをはせていただければと思います。特に、留学生の皆さんは、日本に来てごみの分別に驚かれることでしょう。日本におけるこのような環境保全の取組もぜひ学んでください。また、ごみの新分別の効果は、今後しっかりと検証してまいりたいと思います。

大学としては、現在、分散型のキャンパスへの移行の過渡期にあり、環境への取組について具体的な数値目標をおいていませんが、今後もエコ・キャンパスの実現に向けて、さまざまな要因を分析し、取り組んでまいりたいと思います。

環境報告書の作成にあたっては、本年度も、学内公募に応募した大学生が編集に参加し、より身近でわかりやすい環境報告書を目指しました。学生編集委員は、オープンキャンパスで環境報告書や大学の環境への取組を紹介するなど、対外的にも活動しています。

この環境報告書が、在学生、教職員はもとより、学外の関係者の皆様に本学のエコ・キャンパス化に向けた取り組み状況を理解していただく一助となることを願っております。

桜美林大学 学長 三谷 高康

1

桜美林大学のエコキャンパスに向けた現状と取組

4 明々館・太平館・碩学会館・理化学館・更賜体育館・待望館・けやきの広場・三角駐輪場・桜グラウンド・クラブハウスF棟などの主要な外灯

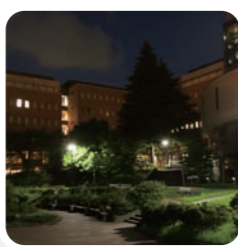
5 **LED照明**
LED(発光ダイオード)照明は発光効率が良く(少ない電気で明るい)、長寿命なため、省エネに加え、省資源・廃棄物の発生抑制の点からも優れています。東日本大震災後、さらに導入を進めています。

10 理化学館 **地中熱利用**
地中は年間を通して一定温度である(夏は涼しく、冬は暖かい)ことを利用して、1階の空調機の外気取り入れパイプを地中に埋設し、省エネを向上させています。

10 理化学館 **大気環境ステーション**
理化学館屋上では、気象のほか、窒素酸化物(NOx)などの大気汚染物質濃度を24時間連続測定しています。

3 学而館・理化学館 **吹き抜け循環システム**
10 学而館と理化学館では、1階と上階の温度差を利用して、冷暖房時に吹き抜け空間の空気循環を行うことにより空調を効率化しています。

1 スクールバス発着所 **ハイブリッドバス**
ディーゼルエンジンと電池・モーターを組み合わせた「ハイブリッドバス」。従来のバスに比べて大気汚染物質の排出が少なく低燃費なエコカーです。現在、3台導入されています。



9 荊冠堂・理化学館 **雨水利用**
10 雨水を貯めてトイレの洗浄用水、消火栓として利用しています。(雨水が不足する時は水道水が供給されます。)節水になります。



学園全エリア **樹木札**
学内の71種の樹木に約150枚の樹木札が付けられています。



6 崇貞館 **生ゴミ処理機**
崇貞館裏には生ごみ処理機があり、カフェなどからの調理くずを土壌改良材にしています。できた土壌改良材は、けやきの広場の花壇や桜美林中学で利用しているほか、近隣の方にもお配りしています。



4 明々館・太平館・崇貞館 **地下水利用システム**
5 普段はトイレ、雑用水(掃除用等)として使用しています。適切な地下水利用は節水になるほか、地震等の災害時の水源になります。



5 太平館トイレ **節水・省エネ型トイレ**
夜間や休日に使座と温水のヒーターを自動的に切るオフタイム節電により省エネし、陶器表面と水流の工夫により大幅に節水するトイレを順次導入しています。



学内全トイレ **学内の紙をリサイクルしたトイレトーパー**
機密書類など、学内でリサイクル用に回収された紙は、製紙会社でトイレトーパーになり、また桜美林大学に戻ってきます。その量は、年間、100~150ロールになります。

3 学而館・明々館・理化学館 **屋上緑化**
4 学而館・明々館・理化学館では、屋上を緑化しています。屋上緑化は気温を下げる(ヒートアイランド対策)、建物の断熱性の向上(省エネ)、都市の保水力の増加、大気汚染物質の吸収・吸着、生態系の回復などの効果があります。



学内ほぼ全ての建物のトイレ、徳望館・崇貞館の廊下、学而館・明々館・碩学会館・理化学館の階段 **人感センサー**
人の存在を感知する人感センサーとタイマーで、照明のオン・オフや調光をしています。



2 一粒館 **太陽光発電**
太陽光で発電した電気は一粒館の電気システムで利用しています。



一粒館・学而館・明々館・崇貞館・栄光館・理化学館・サレンパーガー館 **ガスヒートポンプ、エコアイス**
ヒートポンプは、投入したエネルギー以上の熱エネルギーを利用できるとも省エネ性能に優れた冷暖房機器で、オゾン層を破壊しない冷媒を使用しています。学而館のヒートポンプは、夜間電力で氷を作り昼間の冷房に利用することでピーク時の電力消費を下げ、エコ・アイスグリーンラベル認定品です。



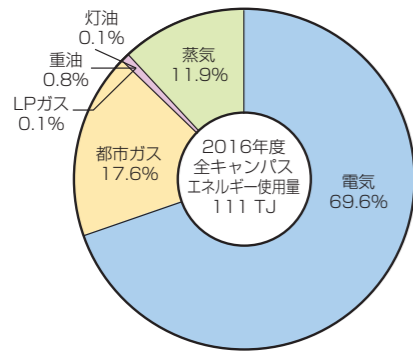
桜美林大学 エコマップ 2017

INPUT (資源の消費)

桜美林大学環境報告書では、これまで、エネルギー消費量と水消費量については町田キャンパスの大学ゾーンのみを対象に報告してきましたが、今後は分散型キャンパスに順次移行する予定であることから、本年度版(2016年度実績)より大学全体について報告することといたします。これにより、プラネット淵野辺キャンパス(PFC。主にグローバルコミュニケーション学群が使用)及び多摩アカデミーヒルズ(主にビジネスマネジメント学群フライト・オペレーション(パイロット養成)コースが使用)が新たに対象エリアに加わります。(なお、併設中・高・幼稚園は引き続き含まれません。)また、これにあわせて、エネルギーの報告対象を、これまで東京都への報告対象(エネルギー使用量が原油換算で30kL未満/年は対象外)から拡大し、省エネルギー法に基づく報告対象(原油換算で30kL未満/年も対象)といたします。

エネルギー消費量(施設分)

エネルギー消費量の内訳(エネルギーの種類別)



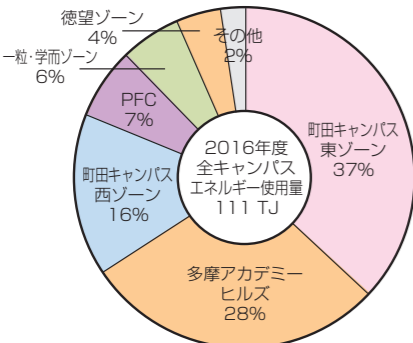
エネルギー消費量は、111TJ(テラジュール※)でした。

これまでの環境報告書における報告対象(町田キャンパス、東京都報告ベース。以下同じ。)でみると、2016年度のエネルギー消費量は68TJとなるので、今回の報告対象の拡大により、約1.6倍になっています。

ただし、比較のため、施設面積当たりのエネルギー消費量をみると、2016年度は、今回の報告対象である全キャンパスの平均では0.82GJ/m²となります。これまでの環境報告書における報告対象の2015年度値は0.84GJ/m²なので、全キャンパスで見た方が、施設面積当たりのエネルギー消費量は小さくなります。

エネルギーの種類別にみると、電気が最も多く、次に都市ガス、蒸気の順になります。また、ゾーン別の使用量をみると、町田キャンパス東ゾーン(明々館・太平館等のあるエリア)が最も多く、ついで多摩アカデミーヒルズでした。多摩アカデミーヒルズでは、蒸気を冷房・暖房・給湯に用いています。

エネルギー消費量の内訳(施設・ゾーン別)



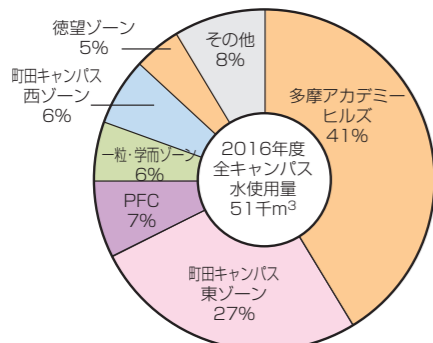
これまでの環境報告書における報告対象について2015年度と比べると、2%増加しました。この増加要因としては、2015年度に重油ボイラーが2ヶ月間故障により停止していたものが2016年度に通常稼働したことがあげられます。

一方、2016年度に待望館のエアコンを省エネ型の機器に更新したことで、今後はエアコンとして約46%の省エネが見込まれます。また、桜グラウンドのナイター照明及びクラブハウスF棟の証明をLEDにしました。

※(注)電気、ガス、重油の使用量はそれぞれkWh、m³、Lで表されます。これを比較するために、エネルギーの単位である「J(ジュール)」に換算しています。T(テラ)は1兆、G(ギガ)は10億を表します。

水使用量

2016年度全キャンパス水使用量



上水道の使用量は、全キャンパスで合計50,984m³(=約51千m³)でした。これまでの環境報告書における報告対象(町田キャンパス)でみると、2016年度の水道消費量は26千m³となるので、今回の報告対象の拡大により、約1.9倍になっています。多摩アカデミーヒルズでの使用量が多いのは、学生寮を兼ねているからだと考えられます。

桜美林大学では、雨水や地下水を利用し、水使用量の削減に取り組んでいます。荊冠館と理化学館では雨水を貯めてトイレの洗浄用水、消火栓として利用しています。また明々館・太平館・崇貞館では地下水を汲み上げて、トイレや雑用水(掃除など)に利用しています。

2016年度の地下水使用量は13,924m³でした。大学で使用する全ての水のうち、21%は地下水でまかなっていることとなります。地下水は適切に利用すれば節水になるほか、災害時の水源にもなります。

OUTPUT (環境への排出)

環境への排出量も、CO₂については、エネルギー消費量にあわせ、本年度版(2016年度実績)より大学全体について報告することといたします。

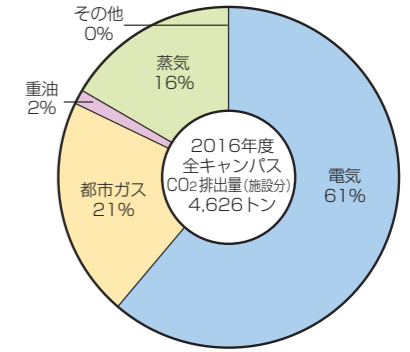
CO₂排出量

2016年度の大学全体のCO₂排出量は、5,005トンでした。町田キャンパスでは、東京電力に比べてよりCO₂排出係数の少ない特定規模電気事業者の電力を利用しているところですが、JXエネルギーについては、2014年度の契約時には排出係数が東京電力より低かったものが、2016年度は増加しています。これは、同社において、電気事業の拡大に伴い、CO₂排出係数の高い石油系燃料による自社発電所の電力の販売量が増加したため、CO₂排出係数が悪化したとのことです。

スクールバスを除く施設分について、エネルギーの種類別にCO₂排出量をみると、電気に比べて都市ガスや蒸気の方が、使用量当たりのCO₂排出量が大きく、CO₂排出量に占める割合が消費量の時よりも大きくなっています。

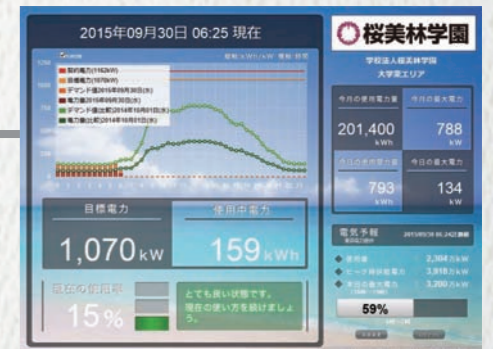
	2016年度消費量	CO ₂ 排出係数	CO ₂ 排出量(トン)	
施設	電気(昭和シェル)	5,854kWh	0.308 CO ₂ - ton/kWh	1,803
	電気(JXエネルギー)	1,910kWh	0.513 CO ₂ - ton/kWh	980
	電気(東京電力)	97kWh	0.500 CO ₂ - ton/kWh	48
	都市ガス	433千m ³	2.24 CO ₂ - ton/千m ³	972
	LPガス	2.0ton	3.00 CO ₂ - ton/ton	6
	重油(L)	23.5kL	2.71 CO ₂ - ton/kL	62
	灯油(L)	1.8kL	2.49 CO ₂ - ton/kL	5
	蒸気(GJ)	13150GJ	0.0570 CO ₂ - ton/GJ	750
	施設計			4,626
	スクールバス燃料	147kL	2.58 CO ₂ - ton/kL	379
合計			5,005	

CO₂排出量の内訳(施設分)



学内の電気使用量が見える化しています

2013年6月より、「電気の見える化」サイトを開設。大学東エリアの電気使用量を30分単位で計測した値を閲覧できるほか、季節毎に定める目標使用電力上限に対する電気使用率等を確認できます。



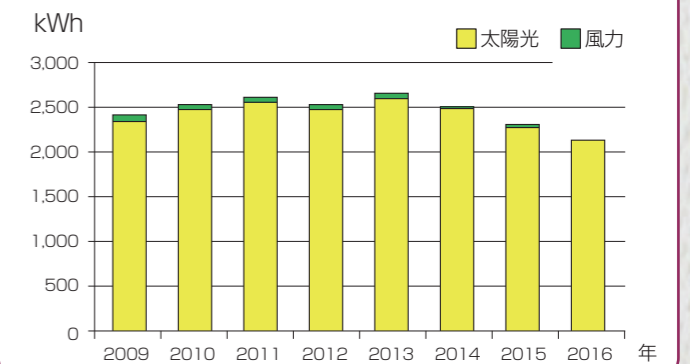
再生可能エネルギー発電量

一粒館屋上に太陽光発電が設置されています。(風力発電装置「さくらかぜI号」は、2015年度に撤去されました。)

2016年(1月~12月)の太陽光発電量(年積算値)は2151.6kWhで、これは1世帯当たりの年間電力消費量のおよそ7割に相当します。前年に比べ太陽光発電量が少ないのは、設置後12年が経過した太陽光発電パネルの劣化の可能性にあります。



太陽光発電及び風力発電の発電量



出所) 坪田幸政、2017年、「町田キャンパスの気象2016」、桜美林論考「自然科学・総合科学研究」、第8号、P.79-103

Topics

町田キャンパスのごみの新分別

2016年10月より試行、2017年4月より本格実施

なぜごみの分別の変更が必要だったのか？

桜美林大学から排出されるごみは、大きく、「一般ごみ」、「缶・ビン・ペットボトル」、「紙」等に分けて回収し、「一般ごみ」については、事業系一般廃棄物として、町田市のリサイクル文化センター（焼却施設）に搬入しています。しかし、「一般ごみ」には、学生や教職員が排出するレジ袋、カップ麺容器などのプラスチックごみが含まれていました。桜美林大学環境研究所とLA（環境学専攻）の学生による、明々館等のラウンジ部分の一般ごみの組成調査によれば、プラスチックごみは平均39%（重量）も含まれていました。廃棄物処理法では、プラスチックごみは産業廃棄物ですので、事業者が町田市の処理施設に一般廃棄物として搬入するのは不適正な処理であり、改善が求められていました。

さらに、ごみ組成調査や卒業論文の調査結果から、次のような課題も指摘されていました。

- 「一般ごみ」にリサイクル可能な紙ごみが平均23%廃棄されており、同時に弁当ごみなどが捨てられているため、6割の紙が汚損され、リサイクル可能な紙がリサイクルされていない。
- ごみ箱の設置の組み合わせが一定でないため、学生が混乱し、分別が徹底されていない。
- カップ麺の汁など、残液が13%含まれているが、その処理方法が学生に周知されていないため、液ごとごみ箱に捨てられており、ごみの重量を増加させるうえ、不衛生である。



「一般ごみ」に捨てられていた、汁が入ったままのうどん

ごみの新分別の検討体制と試行の実施

これらの問題を解決するため、施設・管理部の要請を受け、2016年6月に桜美林大学環境研究所が中心となって、ごみの分別の適正化を目的としたプロジェクトチームが発足しました。このプロジェクトには学内関係部署だけでなく、環境学専攻（リベラルアーツ学群）の学生たちも参加しました。

プロジェクトチームでは、新たな分別方法、ごみ箱の配置方針、ごみ箱のデザインなどを検討し、まず学生が昼食などに利用する学生ラウンジ3か所で、新分別の試行を実施しました。

試行された新分別

- ①紙ごみ（乾いているもの）⇒リサイクル
- ②ペットボトル⇒リサイクル
- ③びん・かん⇒リサイクル
- ④プラスチック（容器・包装・レジ袋など）⇒産業廃棄物として処理
- ⑤生ごみ・割り箸、ティッシュ⇒市の処理施設で処理
- ⑥汁⇒固形物と汁に分け、汁は下水道へ

試行に当たっては、1か月前から、ごみの新分別をはじめの予告を行い、10月3日のごみ箱設置と同時に、「ごみの新分別開始」という特大ポスターをごみ箱上に掲示するとともに、スクールバス及び学内各所にポスターを掲示しました。10月3日からの一週間は、警備員がごみ箱横に立ち、ごみの分別について注意喚起しました。さらに、学長が視察を行い、その写真を含めて大学HPに（お知らせ）「ごみの新分別を試行開始」として掲載し、大学の取組を内外に広報しました。

試行の結果、ペットボトル、びん・かんの分別は概ね適正で、他のごみは混入していませんでした。しかし、リサイクルできる紙ごみに、わずかであるが生ごみが捨てられており、その結果リサイクルできる紙の一部が汚損が見られました。さらに、プラスチックごみに、弁当容器と一緒に、生ごみに入れるべき割りばしが数多く混入していました。

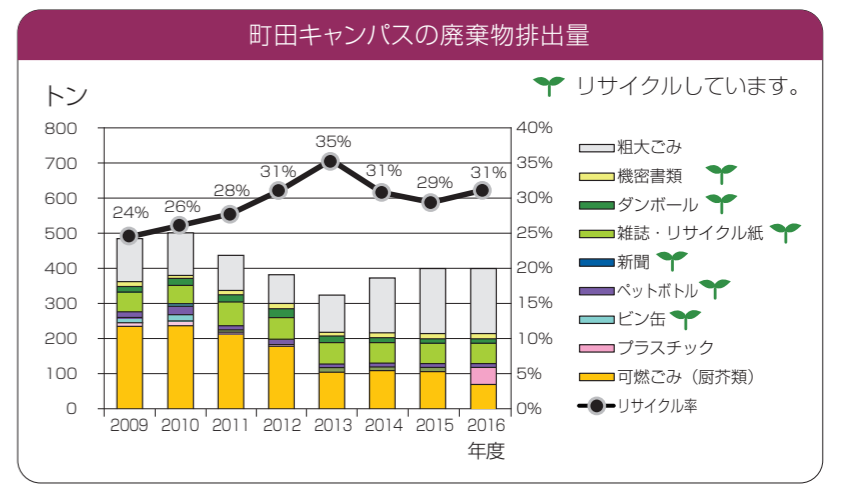
これらの結果を踏まえ、配置や表示を検討し、2017年4月から町田キャンパスおよびプラネット淵野辺キャンパスで新分別を完全実施しました。



2016年度のごみ排出量とリサイクル率(町田キャンパス)

町田キャンパスの2016年度の廃棄物排出量は361トンで、リサイクル率は31%でした。リサイクル率は2015年度と比べると、2%と増加しました。廃棄物の排出量は35トン、前年度比9%の減少となりました。これは、粗大ごみなどの減少によるものです。

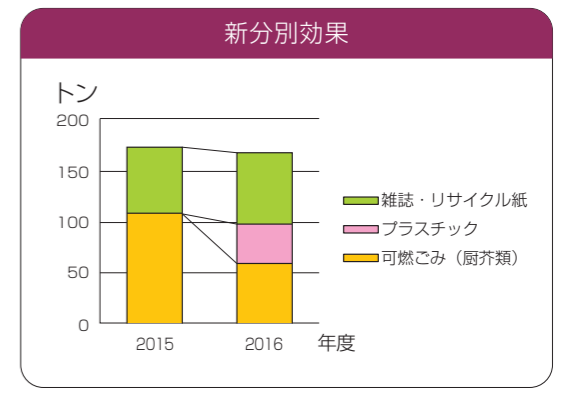
リサイクルされるごみ（機密書類、段ボール、雑誌・リサイクル紙、新聞、ペットボトル、ビン缶）の総量も、機密書類などの減少により減っていますが、廃棄物排出量の総量の減少が大きいので、リサイクル率は2%の増加となりました。



2016年度の新分別(試行)の効果

新分別の効果を見るため、2015年度と2016年度の可燃ごみ（厨芥類）、プラスチック、雑誌・リサイクル紙の排出量を比較すると、2016年10月から試行した新分別の結果、可燃ごみ（厨芥類）の量が減り、分別されたプラスチックが37トン出ました。もともと約4割のプラスチックが含まれていましたから、新分別によりプラスチックが適正に分別されたこととなります。

また、雑誌・リサイクル紙の量は増えており、これまで焼却されていた、本来リサイクルできる紙がリサイクルに回るようになったと考えられます。



2017年度より本格実施

新分別の完全実施にあたって、教職員及びび学生向けにごみ分別ポスター・チラシを作成するとともに、大学ホームページにごみ分別ガイドを掲載しました。

学生の皆さん、ごみをきちんと分別しましょう。



現場を視察し、学生に説明を受ける三谷高康学長





桜美林大学での環境の学び

ECO-TOPプログラム

ECO-TOPプログラムとは

ECO-TOPプログラムとは、東京都が2007年度から設けている、“自然環境に軸足を置いたジェネラリスト”を育成する人材育成・認証制度です。桜美林大学では、2009年度に都の認定を受け、2010年度よりプログラムがスタートしました。

桜美林大学の学生であれば、誰でもECO-TOPプログラムに登録することができ、所定の科目(インターンシップを含む)を履修して単位を取得すれば、卒業と同時に東京都より知事名の修了者登録証が授与されます。修了者は卒業後も東京都からフォローアップがあります。

プログラムの特徴は、民間企業、NGO・NPO、行政における合計20日間のインターンシップです。インターンシップの成果は、学内の報告会のほか、認定大学による合同報告会で発表されます。

桜美林大学におけるECO-TOPプログラムの主な科目

環境と文明、野外安全管理、救急救命演習
 自然理解(環境問題入門)、社会理解(環境の科学)
 動物学、植物学、生態学
 環境法学、環境経済学、環境社会学
 環境マネジメント論、環境と地域
 環境とまちづくり、化学と人間社会
 江戸から学ぶ環境、環境NPO・NGO
 ECO-TOPインターンシップ、環境科学総合演習

桜美林大学ECO-TOPプログラムへのお問い合わせは
ecotop@obirin.ac.jpへ



グリーン・キャンパス・プログラム

グリーン・キャンパス・プログラムとは

東京グリーン・キャンパス・プログラムは、東京都と大学が協定を結び、次世代の担い手である大学生に緑地保全活動に参加する機会を提供し、緑の保全に対する関心の喚起や行動力の醸成を促すことを目的とする東京都の事業です。

桜美林大学は2008年度にこのプログラムの第1号として認定され、七国山緑地保全地域(町田市山崎町及び野津田にまたがる地域)において、「七国山自然を考える会」と連携して雑木林での下草刈、萌芽更新作業、自然観察などの緑地保全活動を行っています。また、小峰公園においては里地・里山における実体験により農作地の利用保全と手当ての大切さの意義を学んでいます。

2016年度には4回のGCPを行いました。



ECO-TOPプログラム東京都庁インタビュー

ECO-TOPプログラムを実施している

東京都環境局自然環境部計画課計画担当 (ECO-TOPプログラム担当) の

小林様と野澤様に、学生編集委員がインタビューを行いました。

(2017年7月実施)



ECO-TOPプログラム制度を始めたきっかけは何ですか？

自然環境保全のジェネラリストとなる人材を育成するために始めたのが、ECO-TOPプログラムです。若い方に自然環境

についてもっと知ってもらい、社会に出てからも活躍できる人を育てられないか、という思いから始めました。



ECO-TOPプログラム修了生の就職先はどのような状況ですか？

農業園芸 公務員 商社
 観光業 アパレル IT業界 環境コンサルタント

大学によって学部学科が異なるので、幅広い分野に進んでいます。

ECO-TOPプログラムの修了生は、環境分野に限定せず、幅広い分野で活躍し、就職先は無限大です。



今回インタビューにご協力いただいた、東京都の小林様と野澤様に東京都に入庁した理由と今後に向けてお聞きしました。



学生時代から様々な社会問題には興味を持っていたのですが、特に環境問題には強い関心を持っていました。将来、環境に関係する仕事に就きたいと思い、東京都を選択しました。



大学では環境を学んでいたわけはありませんが、学生時代にボランティア活動に参加し、環境問題に興味を持ち、環境に携わる仕事をしたいという気持ちが強く、都庁に入庁しました。

東京都の政策で、自然環境分野での大学生対象の事業はあまりありません。それだけに、若い世代を育成するECO-TOPプログラムを多くの学生にチャレンジしていただきたいと思います。

2020年に東京オリンピックがありますが、ECO-TOPプログラム修了生はさまざまな分野で活躍できると思います。

皆さんの活躍を期待しています。

ECO-TOPプログラム 在校生及び卒業生の声

2・3・4年生に聞く！なぜECO-TOPプログラムに登録しましたか？



2年生：環境について深い知識を得ることができ、またインターンシップに参加し実際にどのような活動をしているのか知ることができるため。

3年生：環境学を専攻に決定したとき、環境について学ぶなら資格も一緒に取得したいと思ったから。

3年生：環境学を専攻するにあたって、様々な指導（卒論・インターンシップなど）を受けられるこのプログラムに魅力を感じたから。

4年生：環境学の講義だけではなく、実際に現場に行き、自分の目を見て、環境というものを学びたかったから。

4年生に聞く！ECO-TOPプログラムを通じて自分が成長したと思うのはどのような点ですか？

何事にもチャレンジすることの大切さ、自分の意見を伝える力と行動力を身につけることができた。

「環境」というかなり幅広い領域に触れることで、多角的な視点を大切にする姿勢が身についた。

環境に対する視野が今まで以上に広くなり、より一層環境に対して考える機会が増えた。



卒業生に聞く！ECO-TOPプログラムを通して得られた経験は今の就職先で活かしていますか？

環境学の知識が現在の仕事に直接役に立っているわけではありません。ですが、3団体に計20日間インターンシップに行った経験は間違いなく役に立っています。役に立っていると思う点は3つあります。

①発表に慣れていること

ECO-TOPプログラムに参加して、研修先や学内、都庁での発表など、発表の機会が多くあり、プレゼンテーションのスキルが向上したと思います。このため、現在勤務している会社でも、同期の中で、自分はかなり発表慣れしていると感じることが多くあります。必然的に発表することも多くなり、ECO-TOPプログラムをやっていて良かったと感じています。

②多くの社会人の方とお話する機会があったこと

私も社会人になり、毎日のように新しい人と出会います。もしECO-TOPプログラムに参加していなかったら、学生時代に社会人の方とお話する機会があまりなかったと思います。ECO-TOPのインターンシップで色々な方々と出会えたおかげで、現在あまり緊張せずに話ができると感じています。

（現在、製造業（機械系）に就いている2016年度卒業生にお話を聞きました。）

③質問力がついたこと

私の会社では「わからないことを積極的に質問しなさい」と言われます。桜美林大学では、インターンシップの事前研修や事後研修で、必ず他の人に質問をするよう指導されました。インターンシップの研修先でも色々な質問をしていたので、鋭い質問が以前よりはできるようになったのではないかと感じています。これも、社会に出てからとても重要な力だと感じています。



学生サークルの活動

アグリベラル・マルシェ

代表の芳賀さんにインタビューしました。

Q. どのような団体ですか？

アグリベラル・マルシェ（以下マルシェ）は「農のそばへ一歩」をキーワードに大学生等に農業を知ってもらおう活動をしています。団体名でもあるアグリベラル・マルシェという農業イベントを12月に開催しており、定期的に会議を行っています。

Q. 活動内容を教えてください

2017年2月には、大学近隣の橋本で開催された農園キットのワークショップを、アート団体「はやおサークル」と共同で開催しました。牛乳パックを容器として野菜を栽培するキットの作成と飾りつけを行い、参加した子供たちに喜んでもらうことができました。

Q. 活動の醍醐味は？

農業に携わる第一次生産者とのつながりをもつことで、食と農の大切さを適切に知ることができます。スーパーでは大根が1本100円で販売されていますが、苗植え、水やり、収穫などの手間を考えると安すぎることに気づかれます。実際に活動に参加し、農業の大変さを知ること、もっと食品を大切に扱うようになるのではないのでしょうか。

また、土に触れることができない学生が増えていることに問題意識を感じています。土は汚い、菌がいて体に良くないという先入観ばかりが先走っています。私自身も土は汚いというイメージを持っていました。しかし、手入れされた土壌から育つ採れたての野菜は汚くありません。

農家さんとの交流と農作業を通しマイナスのイメージは払拭されました。また、畑で生き物と触れ合う機会が増え、昆虫に対して苦手意識が薄れました。

環境を変えると嫌いなもの、苦手なものへの意識が変わるものです。農業がその1つにきっかけになり得ると考えています。農を身近に感じてもらえるよう情報を発信していきます。自然と触れ合う機会が減ったからこそ、ぜひマルシェに足を運んでみてください。

連絡先：agri.liberal@gmail.com

Agri Actionへ一言外部にも発信して向上していきましょう！



アグリベラル・マルシェ



Agri Action

Agri Action

代表・副代表の小松さん、二見さん、土居さん、安齋さんにインタビューしました。

Q. どのような団体ですか？

大学の敷地内で無農薬で野菜を栽培している団体です。今年度は1-3年生が36人所属しています。

Q. 1年のハイライトは？

一大イベントの大学祭では、栽培しているサツマイモを余すところなく使用し、芋けんぴと蔓リースを販売予定です。

また、農業団体としてイベントのアグリベラル・マルシェに出展したいと考えています。

Q. 活動の大変なところは？

活動を通し野菜栽培の難しさやありがたみを感じることが出来ます。日々試行錯誤を繰り返し、野菜がうまく育つよう工夫しています。除草剤や農薬は使用しないため、雑草の生育が盛んで手入れが大変です。夏は日差しと暑さがあり体力勝負です。

桜美林大学の数少ない環境系の団体です。大学にはリベラルアーツ学群がありますが、農学専攻はないため、この団体を通して農業に興味を持ってほしいです。

連絡先：キリスト教センター chap@obirin.ac.jp Twitterアカウント：@obirin_AGRI

マルシェへ一言情報共有を行い仲良くしましょう！

サービスラーニング科目

【サービスラーニング科目とは?】

サービスラーニングとは、「大学での授業」と「フィールドでの活動」を両輪にして動く学習のことで、授業の中で様々なボランティア活動をする科目です。

15回の授業の他に、2単位で約20時間ボランティア活動があります。ボランティアの内容は、授業の内容と関連しているものです。このサービスラーニング科目で、目的としていることが3つあります。

1つはテーマに関連したことを体験して、授業の内容をより深く、頭だけでなく実感することです。2つ目は、大学・学生が地域社会に貢献することです。ボランティアをした先で、評価してもらうことや喜んでもらうことを通して、地域社会に貢献することの大切さを実感できます。

3つ目は、市民を育てること(市民教育)です。社会的な活動を通して、授業を離れてもボランティアでやっている問題に関心を持ちつづけること、問題を解決しようとする態度を身につけることです。

サービスラーニングに環境分野があまり多くないので、是非増やしてほしいです。



サービスラーニングセンター長 牧田東一先生

こんな授業があります

【サービスラーニング科目】

授業名(開講学期/担当教員)
以下の科目を含めて、全学群に42科目があり、年間432人の学生が受講し、総ボランティア時間数は約9千5百時間となっています。(2016年度)

地域社会参加プログラム

- 私たちに身近な貧困(春・秋/林加奈子)
- 多文化学生による協働学習(春/山崎真一)
- アメリカ福祉研修(秋/福田潤)
- 年少者日本語教育(秋/川田麻記)
- 子どもと教育(春・秋/林加奈子)
- 災害支援とボランティア(春・秋/片谷教孝)
- 多文化共生(春・秋/加藤恵美)
- 地球にやさしい食と農(春/渡辺雅人)
- 地域に根差した福祉(春・秋/爾寛明)
- 性別で差別しない社会(秋/林加奈子)
- 沖縄学入門(秋/中生勝美、清水竹人、加藤朗)
- サービスラーニング自由課題(秋/林加奈子)

国際理解教育プログラム

- モンゴル環境研修(春/都馬バイカル)
- マレーシア・子供の家・ボランティア研修(春/渡辺雅人)
- カンボジア・ストリートチルドレン・ボランティア研修(秋/牧田東一)
- アメリカボランティア研修(秋/山崎慎一)
- アメリカ幼児教育研修(秋/長谷川淳一)
- アメリカ福祉研修(秋/福田潤)
- フィールドワーク
- 国際協力フィールドワーク フィリピン(春/渡辺雅人)
- 国際協力フィールドワーク アフリカ(春/渡辺雅人)
- 国際協力フィールドワーク 日本(秋/牧田東一)
- 国際協力フィールドワーク インド(秋/渡辺雅人)
- NGO/NPO実務実習(春/奥田裕之)

授業紹介 1 災害支援とボランティア

担当教員 片谷教孝

● 授業の概要

災害を主なテーマにしています。授業では、「なぜ災害が起こるのか」、「その被害が広がるのをどのように防ぐのか」という技術的な話をし、さらに、実際に過去に起こった災害の事例を見ながら対策について考えるのが主な内容です。また、ボランティア論として、災害が起こった時に現場にいた人の心理を災害心理学を通して学び、その災害心理学の中で被災した人の心のケアの話もしています。そして、神戸に見学に行き、宮城にボランティア実習に行きます。通常の科目よりも2倍くらいの時間を要する科目です。



● 授業を通して学生に伝えたいこと

災害に関する知識を持たないといけないということを伝えたいです。知識をもっていないと災害の犠牲になってしまいます。実際に、災害に関する教育を受けていた人たちは災害時に助かっているので、知識を持つことが自分の身を守ることに繋がるといことを伝えたいです。

また、ボランティアは相手のためだけでなく、自分のためでもあるということも伝えていきます。相手のため、地域のためにやるのと同じくらいに自分のためでもあると私は考えています。



授業を履修した学生の感想

ボランティアでイチゴ農園での農業作業や、お祭りの手伝いなど普段できない経験をして、なおかつ被災地の状況を知ることができて視野が広がりました。そればかりではなく、自分から動くという主体性の重要性を再確認できた授業だと感じました。(LA学群 3年 男子)



東日本大震災から6年が経ち、私達のなかで大きな自然災害があったという印象が日に日に薄くなっているかと思えます。震災からの被害から立ち直ることが一番の目標ですが、地方で活動して、そこで生活する人たちと一緒に行動を共にすることで、地元の人々が復興するために頑張っていることを肌で感じられたこともこの授業で得られる経験です。(LA学群 3年 女子)

夏に初めて被災地(福島県双葉郡富岡町と浪江町)を訪れたときに、避難解除されているのに住民がいない町、片付けられていない瓦礫や放置された家を見て衝撃的でした。自分が震災を軽視してしまっていたことに気づかされ、反省し考えを改めるきっかけとなりました。(LA学群 3年 女子)

授業紹介 2 地球にやさしい食と農

担当教員 渡辺雅人

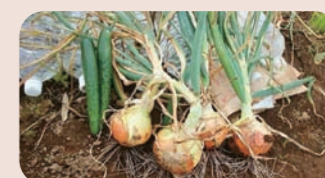
● 授業の概要

座学で学ぶのは、私たち日本人が食べている食についてです。例えば、遺伝子組み換え作物や食品添加物などがあります。日本の野菜は、30年前までは実から種を取っていましたが、最近の農家さんは種を毎年買っています。F1種と呼ばれる、食べ残した実を植えても芽が出ない野菜(雄性不稔で作られてた種子)を作っています。これは不妊の原因になると言われています。なぜF1種に成り代わってしまったかということなどを授業で話します。今自分たちが口にしているものがどういうものなのかということを知ってもらい、なぜそういうものを食べるようになってしまったのか?ということについて考えてもらいます。



● 授業を通して学生に伝えたいこと

やはり食の問題です。特に戦後70年弱で、日本人の食が悪いほうに変わってしまいました。日本人全体があまり食に対して意識が高くないのです。50代の方々が20代の頃に食べていたものと、今の学生が食べているものとは異なるリスクがあります。今後、同じものを食べ続けているのか?ということを学生に考えてもらいたいです。また、自分たちの食を見直すために、自分たちで畑をやっています。畑で栽培しているものもF1種の野菜ですが、限りなく有機に近いものを作っています。また、この畑は「淵野辺ふれあいガーデン」という170世帯が借りている農園の一部を借りていて、地域住民、主に70代前半の方々との交流もあります。この農作業を通して、自分たちの食を見直すとともに、地域の住民やお年寄りの方との世代を超えた交流をすることをねらいとしています。



授業を履修した学生の感想

実際に畑を耕すことで、データでしか見たことのなかった日本の農業についての理解が深まったと思います。また、食品安全をもっと身近な問題であるととらえることができるようになりました。(LA学群3年女子)

実際に農園に行って農業活動に参加して、やはり、今だんだんと増えている地球人口を養うために、より効率のよい植物生産をしなければならぬと思いました。(LA学群4年男子)

この授業を受けてから、スーパーで陳列されている商品という、目に見えているものだけでなく、その商品がここに届くまでのプロセスを、ふと手をとめて考えるようになりました。(LA学群2年女子)

桜美林のゼミに聞いた！～私 たちにできるSDGsへの貢献～



J. F. OBERLIN

【ゼミ紹介】

今回は、環境報告書編集委員が選んだ、4つのゼミにSDGs(持続可能な開発目標)について語ってもらいました。事前に17のSDGsのテーマのうちゼミの内容に近いものを1つ選んでいただき、3年生または4年生のゼミ生2、3人にインタビューを行いました。各ゼミの紹介と、ゼミでの学びがSDGsにどのように貢献できるかを話していただきました。

【SDGsとは?】

SDGs(持続可能な開発目標:Sustainable Development Goals)とは、2015年国連総会で採択された「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030アジェンダ」で示された行動計画です。持続可能な開発のための17の国際目標と169の達成基準からなり、人間、地球及び繁栄のための行動計画としての宣言及び目標です。

10 人や国の不平等をなくそう

～人や国の不平等をなくそう～



左から:向井さん、深澤さん、根本さん

- Q:ゼミのテーマはなんですか?
A:多文化共生とコミュニケーションです。
Q:ゼミを一言で例えると?
A:「発見だらけ」です。私たちの知らないこと、経験したことのないことを新しく知る機会がたくさんあります。
Q:ゼミではどのような活動を行っていますか?
A:ゼミ前期は戦後に行われた朝鮮半島

からの引き揚げについて学びます。ゼミ単位でフィールドワークや研究の進め方について学んでいき、学会発表も行います。後期は個人で設定したテーマの研究を行います。卒論の履修が推奨されており、ゼミ論をさらにブラッシュアップしたものを提出します。個人設定のテーマ例として、国際結婚、離婚と子ども、多文化家族のアイデンティティ、爆買などがあります。

Q:SDGsにゼミの学びがどのように貢献しますか?
A:多様な背景や個性を持った人たちがその違いを認めて同じ社会に暮らすことが多文化共生の目標です。そのために歴史認識の共有から始まります。コミュニケーションをとる中で大切なことは「共感性」です。ゼミでは様々な国の文化、

浅井ゼミ

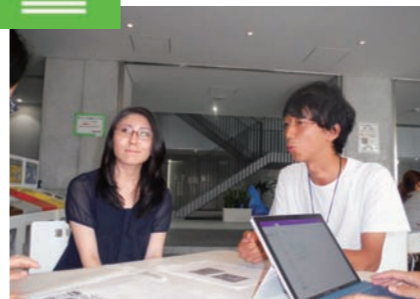
価値観に触れる機会が多く提供され目標10について考えるために役立っています。現在、私たちは北朝鮮に対してネガティブなイメージを持ちがちですが、『天馬山』には北朝鮮の人々が困窮する日本人を助けた記録があります。日本人が朝鮮の学校で同化教育を行ったり、教師からの日本語の話せない生徒への暴力があったりしました。高齢化に伴い戦争体験、引き揚げ体験の話聞く機会が減っています。若者は積極的に理解し、当事者意識を持つことが大切です。



ゼミでの留学生とのワークショップ

15 陸の豊かさを守ろう

～陸の豊かさを守ろう～



左から:牛田さん、東末さん

- Q:ゼミのテーマは何ですか?
A:身近な植種を知ることと見分けることです。
Q:ゼミを一言で例えると何ですか?
A:「雑草を愛でる会」です。
Q:ゼミでは主にどのような活動をしていますか?
A:花暦という、月に一回学園内の決まったルートを歩いて、季節ごとに咲い

ている花を調査しています。実をすりつぶしてシャボン玉づくりをしたり、身近な植物をより詳しく知るために、で科を決めて、ゼミ生みんなに説明できるようにまとめるということもやっています。新治という場所に行って、調べたい種類について調べるといこともしています。*大学(施設管理部門)へお願い今年雑草が刈られすぎて、花暦の調査がしにくくなってしまっています。自生のギンランが無くなってしまっていたので、過度に自生種を刈らないでください。

Q:SDGsのテーマにゼミでの学びがどのように貢献できますか?
A:陸の豊かさといっても、ただやみくもに植林をすればよいというわけではありません。その地域の気候などに合っている木を植えないと、木が育たないです

木場ゼミ

し、その地域の生態系を壊す恐れがあるからです。その地域に自生しているものを調べてから植林することが大事です。そのために、今ゼミでやっている、地域にどのような種類があるのかという調査は、とても大事なことではないかと思っています。



11 住み続けられるまちづくりを

～住み続けられるまちづくりを～



左から2番目インタビューに答えていただいた大村さん

- Q:ゼミのテーマはなんですか?
A:国際協力、国際交流です。
Q:ゼミを一言で例えると?
A:「和気藹々」です。みんなが個性的で興味に対して積極的です。
Q:ゼミではどのような活動を行っていますか?
A:4つのプロジェクトに分かれ活動を行っています。都路プロジェクトでは福島県田村市都路町で被災後の復興支援や

町興し。カンボジアプロジェクトではカンボジアの孤児院での奉仕・スラムや貧困問題の学習。寿プロジェクトでは日本三大ドヤ街の横浜市寿町で日雇い労働者の実態・国内の貧困の問題・支援方法の学習と現地での炊き出し。シチズンシッププロジェクトでは「市民であるとはどういうことか」を軸に外部講師の講演聴講と啓発活動を行っています。ゼミの形式は人数が多いことを活かし賑やかにディスカッションをしたり、英語の文献購読や各プロジェクトについて発表と意見交換を行ったりしています。

Q:SDGsにゼミでの学びがどのように貢献しますか?
A:特に都路プロジェクトはダイレクトに目標11と関連しています。現在の都路町での町興しが今後の街の持続可能性に大きく影響すると考えています。過疎化

牧田ゼミ

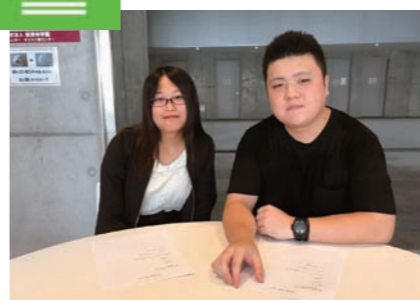
に直面する今、都市部と地域のコネクションを作る方法を模索し、現地の人と学生とが繋がることから始めています。人、地域、文化が守られる街になっていくために、地域の実態や特性を調査しそれに合った方向性を考えています。今年度の現地活動では、これからの町興しの下地となるようコミュニティ全員の顔と名前を憶えて、まずは一人と一人が繋がることを目標にしています。こうしたことが都市との格差是正のという大きな課題にもつながっていくのではないのでしょうか。



都路プロジェクト

15 陸の豊かさを守ろう

～陸の豊かさを守ろう～



左から:今田さん、綿貫さん

- Q:ゼミのテーマは何ですか?
A:昆虫の採集をして、学内の生息種のリストを作ります。
Q:ゼミを一言で例えると
A:「探検を通して童心に帰る」です。
Q:ゼミでは主にどのような活動をしていますか?
A:基本的には、外に出て虫を採集し、昆虫のリストを作っています。毎年、今

まで見つからない種が記録されます。雨の場合は、個人で興味があるテーマについて調べてきて、ゼミで発表をしたりしています。

また、伴野先生は虫以外のことにもお詳しいです。近くを森を回った時に、鳥の鳴き声だけで、「あれは〇〇だね」と、鳥の名前を当てていたり、植物の葉のちょっとした細かいところを見て、違いを教えてくださいと、動植物全般に関する知識が豊富で驚きます。

Q:SDGsのテーマに、ゼミでの学びがどのように貢献できますか?
A:陸の豊かさを守るためには、生態系を理解することが必要だと考えます。最近、外来種が気温の上昇によって南方から北上してくるなど、生態系への影響が心配されます。学内でも、このよう

伴野ゼミ

昆虫が数種類見つかっています。ゼミで虫を採集しリストを作りながら、昆虫や動植物の生態を学ぶことが、それらが生態系においてどの位置にあるのかというのを把握するのに役に立つのではないかと思います。



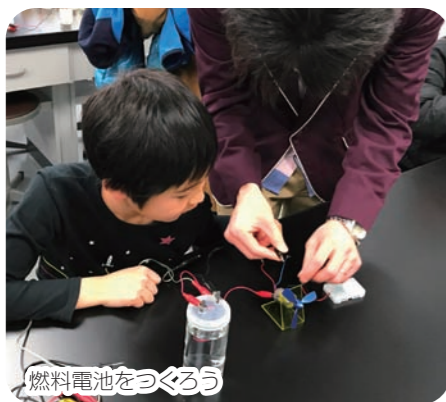


桜美林大学の環境に関する社会貢献

小学生向け公開イベントの実施

桜美林大学環境研究所では、2011年度より毎年、小学生向けの理科・環境教育公開イベントを実施しています。

2016年度は、春休みとなる2017年3月25日に、「こどもサイエンス教室」を開催し、近隣小学校の児童に体験授業の受講や理科・環境関係の実験などの体験をしていただきました。来場者は小中学生127人、幼児72人、保護者を含め合計324人でした。



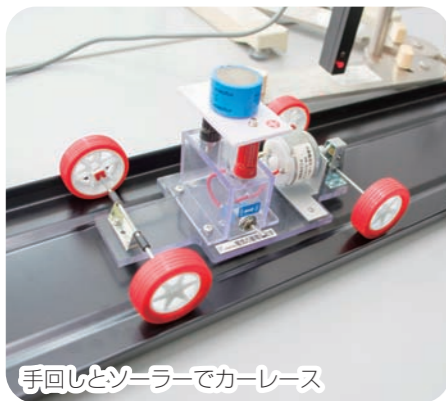
燃料電池をつくらう



くだものと野菜で電池をつくらう



オリジナル風車をつくらう



手回しとソーラーでカーレース



何セミの抜け殻?

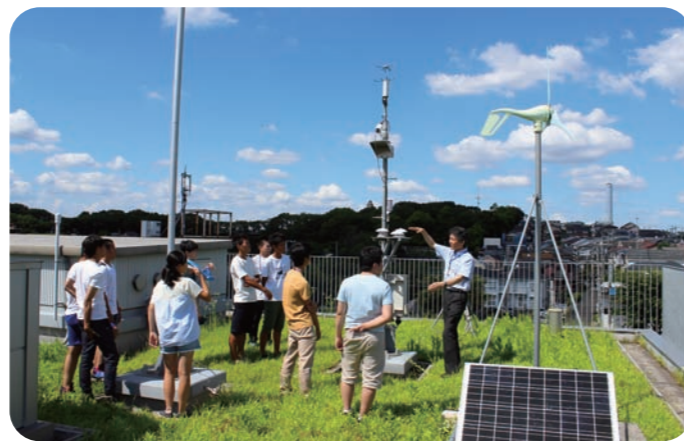


マイアースで大学生のお姉さんと勝負!

高校生のための環境科学講座実施

日本学術振興会の研究成果社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の補助を受け、7回目となる高校生のための環境科学講座「大気科学の最先端大気科学の最先端～持続可能性と再生可能エネルギー」を2016年8月7日に実施しました。10人の受講者がありました。

2015年は、スーパー・エルニーニョ現象の影響で、世界で異常気象が観測され、世界の平均地上気温は最高値を更新しました。小さな地球に持続可能な社会を構築するために、再生可能エネルギーの利用は必要不可欠です。環境科学講座では、再生可能エネルギーの科学と利用技術(ロボット工学)を体験的に学び、持続可能性について考えました。



境川クリーンアップ作戦への参加

2016年7月24日に行われた、相模原市・町田市が後援する「境川クリーンアップ作戦」に本学から学生と教職員合計1,306人が参加しました。このイベントは、町田市と相模原市の間を流れる境川の清掃活動を通して、環境保全だけでなく、生活圈や経済圏を共有する町田～相模原の行政区分を超えた交流とまちづくりを目指した活動です。

作戦当日は晴天に恵まれ、桜美林大学からは、11会場に39団体が参加し、境川の美化に取り組みました。

この清掃活動を通じ、本学がキャンパスを置く、町田・相模原両市の近隣自治会や他参加団体の方々との交流が生まれました。



【本学からの参加団体】 順不同 大学祭実行委員会・美術クラブアトリエ部・ラグビー部・柔道部・少林寺拳法部・軽音楽部・ソフトテニス部・空手道部・演劇部・男子バスケットボール部・アーチェリー部・ボランティア部・ゴルフ部・バドミントン部・硬式庭球部・野球部・フォークソング研究会・ちょんれん・ソングリーディング部CREAM・チアリーディング部・女子ラクロス部・写真部・男女ソフトボール部・サッカー部・女子バスケットボール部・落語研究部・弓道部・アメリカンフットボール部・陸上競技部・剣道部・沖縄エイサー部・男女バレーボール部・サイクリング部・Obirin-Dancing-Company・スキー部・空手道部・モダンジャズ部・藤倉ゼミ・山崎ゼミ・教職員有志

環境研究所公開講演会

「境川、流れ流れて相模湾 -川のごみと海岸のごみを考える-」

桜美林大学環境研究所では、毎年、公開講演会を実施しています。2016年度は、「境川、流れ流れて相模湾 -川のごみと海岸のごみを考える-」と題して、毎年参加している境川クリーンアップ作戦の実行委員長の山口氏と、境川が流れ込む相模湾のごみの処理を担当する(公財)かながわ海岸美化財団の柱本氏をお招きし、それぞれについてご講演をいただくとともに、聴衆と意見を交換していただきました。

日時：2016年12月23日(金・祝) 14:30～16:00

場所：町田キャンパス太平館A200教室

演題「境川クリーンアップ作戦について」

講師：境川クリーンアップ作戦実行委員長 山口平太郎氏

演題「相模湾の海岸ごみの現状と対策」

講師：(公財)かながわ海岸美化財団 柱本健司氏

参加者数：42人(学外15人)



参加者の声

境川クリーンアップ作戦については聞いたことがありましたが、どのような経緯でクリーンアップ作戦が始まったか、推移していったかがわかりました。

海のごみなどは何となく自分の生活からほど遠い感じがしますが、自分たちの生活ととても関係していることを知り、興味深く聞くことができました。面白かったです。

海岸ごみは川から7割と言うことに驚いた。あらためて川の清掃の重要性を感じた。

2016年度版環境報告書を読んで

2016年度版桜美林大学環境報告書に対して、井上先生と岡崎先生、そして学生からご意見をいただきました。いただいたご意見は今年度に反映できたものも、次年度以降の課題となったものもあります。ご協力ありがとうございました。

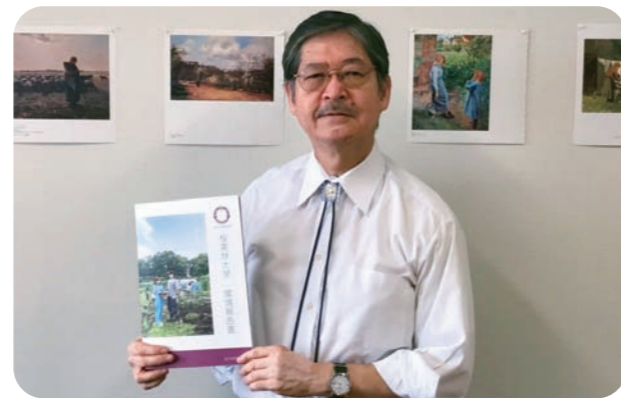
編集委員一同

冒頭の学長メッセージ(インタビュー)に続いてすぐに、環境改善のために本学において実践している大小の事例をわかりやすく紹介し、その成果をグラフと数値で具体的に示したこと(セクション1)は、「報告」という目的にとって成功していると思いました。

わたしも少し関わったことのある(といて実際には創設メンバーを個人的に励ました程度ですが)アグリアクションをはじめとして、学生たちの活動紹介の記事(セクション2)は一番興味深く読むことができました。そして、社会貢献に関する紹介記事(セクション3)を通して「小学生向けの公開イベント」のことを今回はじめて知ることができました。

どのような活動も目標と目的の両方が必要です。目標は数値で示すことが大事です。目的はおそらく数値ではなく思想としてあるいはビジョンとして共有すべきことなのでしょう。わたし自身が環境問題を自分の課題として取り組むときにどのようなビジョン(少し大げさに言えば世界観)を思い描くことができるのか。この報告書を読みながらそんな事も

考えさせられました。最後に提案：数メートル離れても見えるくらいに表紙の文字を大きくしてはいかがでしょうか。手元にある現物は手渡されてはじめて表紙の『環境報告書』という題を読むことができました。



大学チャレン リベラルアーツ学群(キリスト教専攻)/人文学系 教授 井上大衛

大学でジャーナリズムを教える身として、そして34年間新聞社で働いた身として、少々「いじわる」な視線で2016年度版報告書を読ませていただきました。

しかし——「あら」を見つけることは無理でした。編集にあたった学生たちや先生方の手腕に脱帽いたします。

ふつう、この種の冊子に求められるのは、①全体の構成がすぐにつかめる、②個別の記述が分かりやすい、③エピソードがおもしろい、④デザインが美しく、かつ読みやすい——といったところでしょうか。

まず、すばらしく思ったのは④です。聞くところによると、こうしたデザインは学生編集委員たちがパソコンで原案をつくったとのこと。トータルな印象はもちろん、各ページの色使い、割付などもプロレベルでした。②もバッチリです。それぞれの話題についての記述が簡にして要を得ており、一読で理解できます。グラフや写真も必要十分でした。③については「アグリアクションvs.片山ゼミ」などにいい味が出ていました。

以下は、「あえて」指摘するものです。読み終えてみれば、全体の構成も具体的な記述もすんなり理解できるのですが、読

み始めでは多少の「辛さ」を感じました。巻頭の学長インタビューがどのように位置付けなのか、まず悩みました。その下に目次があるのですが、もう少し全体を俯瞰できるガイドラインになっていたら、とも思いました。この見開きページのどこかに、「今年の報告書はこうまとめました」といった一文があると、「とっつきやすさ」がさらにアップしたかもしれません。

2017年度版に大いに期待しています。



リベラルアーツ学群(メディア・ジャーナリズム専攻)/言語学系 教授 岡崎哲也

環境報告書2016年度版を読んだ感想

授業「環境マネジメント論」履修学生

ほとんどの調査結果にグラフが付いているので、とても見やすかった。また、通学している学生でもあまり知らない大学の環境への取組もしっかり記載されていた。一番気に入ったのがごみの分別方法を一新したことによる効果だが、2017年度版に記載されるそうなので期待したい。(4年男子)

全体的に写真が多く、読みやすく見やすい。アグリアクションはいつ活動しているのかがわかりにくい。この報告書を見て活動に興味が出て参加したい人もいと思うので、できたら活動時間か場所を記載してほしい。(3年女子)

企業と異なり大学らしい環境報告書で良いと思った。特に桜美林大学のマップにどこに何のエコをしているか書かれているのは、学生も近隣住民からもわかりやすいと思う。しかし、目次をもう少し大きくするべきだ。ごみ分別が新しくなったことはもっと大きくトピックスにすべきだと思う。(3年男子)

文章だけでなく、たくさんの写真やイラストがあってわかりやすかった。写真やイラストなどの色使いも優しい感じが出ている。文字の区切りで点線は少し目がチカチカする。スクールバスがハイブリッドバスだと知らなかった。もう少し環境に配慮していることを全体的にアピールすべきだと思った。(2年女子)

授業「自然理解(環境問題入門)」履修学生

桜美林大学の環境への取組を知ることができてとても身になるとともに、自分もさまざまな取組に協力する姿勢をもとうと思った。今年度からごみの新分別が開始されたが、以前のごみ分別との違いや環境への影響の違いを掲載すれば、多くの人のごみ問題に対する意識改革につながると思うので、掲載してほしい。(2年女子)

p.15の社会貢献活動について、このようなイベントを開催することは広く環境のことについて知ってもらう良い機会であり、また地域の人々とコミュニケーションができるので、ぜひ学生主体でもっと展開していけば、大学と環境の活性化に繋がると思う。主催する側として参加してみたい。(2年男子)

報告書の中にあつたECO-TOPプログラムにとっても興味がわいた。新しい体験ができたり、インターンシップ先でさまざまな人との出会いがあるところに魅力を感じた。(1年女子)

ECO-TOPプログラム修了者の就職先が知りたいと思った。(1年男子)

桜美林大学がエコキャンパスに向けた取組をたくさんしていることをはじめて知った。地中熱や雨水、地下水を私たちも意識せずにトイレなどで利用していると思うと驚いた。大学内のごみ分別に対する意識が高く、ごみ箱の表示なども分かりやすく、学生が強い意識をしなくても分別を促す環境がとても良いと思う。報告書も環境にやさしく作っていて、表示からも環境への配慮が感じられた。(1年女子)



見やすいことは見やすいが、小見出しの一つ一つがあっさりとしていた印象を受けて、目にとまりにくいと感じた。(3年男子)

今年から試行が始まった細かいごみ分別について、また三谷学長がおっしゃっている桜カフェを通して「食について考えていくような機会」について取り上げてほしい。どれほど効果があったのだろうか。町田キャンパス以外の校舎のことも載せてはどうだろうか。新しく建設予定の百人町のキャンパスの環境対策方針など。(3年女子)

情報が多すぎるのではないかと感じた。情報量の多いページと少なめのページを混ぜて、環境に興味のある人もない人も読みやすいようにした方が良かった。(1年男子)

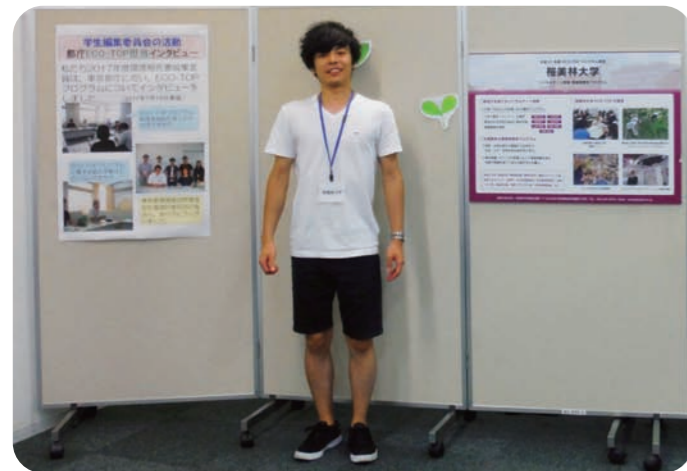
桜美林大学で行われているフィールドワークや卒業論文、卒業生の言葉など、受験生や在学生にとっても良い内容がたくさんあると思った。(1年女子)

エコマップが、大学の地図に合わせてどこに何があるのか分かりやすく表されていて良かった。先輩達の気持ちや考えを知ることができて、共感を持つことができた。(1年女子)

編集委員会の活動

2017年度オープンキャンパスに出展

2017年8月に開催されたオープンキャンパスに、環境報告書学生編集委員会として参加し、クイズ形式で大学の環境への取組などを紹介しました。来場した高校生の皆さんには、桜美林大学の環境への取組に対する感想や、ご自身が高校までに取り組んだことのあるエコ活動について書いていただきました。たくさんの皆様にご来場いただき、ありがとうございました。



編集後記

担当したのは学生サークル活動と文系ゼミ紹介のページです。インタビューに応じていただいた学生のみなさんありがとうございました。1団体1/2ページという限られたページの中では、インタビューでの熱い語りのすべてを記事にできなくて残念でした。インタビューを行ったのは試験前後の期間で忙しい中でしたが、サークルのそれぞれの想いやゼミのSDGsの貢献を伝えるに集まっていたことができました。特に「団体の雰囲気を一言で表すと？」では、多様な学部、団体の集まる桜美林ならではの、それぞれ違った回答を得ることができました。

リベラルアーツ学群4年 清水真衣

環境報告書では、サービラーニングとゼミのページを担当しました。どちらに関してもインタビューが多く、コミュニケーション能力の必要性を感じました。また、インタビューした内容を編集する際に、うまく文章にまとめることが難しかったです。今回の編集を通して、記事の編集能力が上がった気がします。自分で考えた記事を通して、ゼミの活動やサービラーニング科目の内容を伝えることができたのが、よい経験になりました。

今回、インタビューにご協力くださった先生方、学生の皆様ありがとうございました。

リベラルアーツ学群3年 金子権孝

私はインプットアウトプットのページを担当させていただきました。このページのグラフの作成を進めていくなかで、桜美林大学でのエネルギー消費量やその内訳など普段知ることができないことを知ることができとても勉強になりました。

また、環境報告書委員会としてオープンキャンパスに参加させていただいたことがとても印象に残っています。桜美林大学での環境の取り組みを高校生や保護者の方々に伝えることで自分自身も学ぶ部分がありましたし、プレゼンテーション能力を磨くことができたため、とても貴重な経験になりました。

リベラルアーツ学群3年 田中公規

ごみの新分別ページを担当させていただきました。ごみの新分別ができた時、これが1つの良い大学づくりにつながると思っています。私が所属している藤倉ゼミで大学のごみ分別調査を行っていますが、その調査結果がゼミ内だけで終わるのはもったいないと考えていました。身近であるごみの分別だからこそ、環境報告書として広報できたことが嬉しかったです。

また、環境への取り組みをもっと外部にアピールするために、大学のオープンキャンパスに出展する企画を考えたことも、貴重な体験でした。私の考える桜美林大学の自慢できるところを高校生に伝えたい、という今年の目標を達成することができました。

リベラルアーツ学群3年 玉田侑也

都庁インタビューとエコトップ生へのインタビューを担当させていただきました。インタビューにご協力いただいた都職員様、エコトップ生の皆様ありがとうございました。私自身もエコトップ生であるので、様々なインタビュー内容から勉強させていただいたことも数多くありました。

特に、都職員様へのインタビューではエコトップについて様々なことを聞ける良い機会となり、また東京都自然環境部はどのような環境政策をしているかなどエコトップだけではなく、環境問題についても話し合うことができました。

リベラルアーツ学群3年 伏見隼人

この環境報告書は、桜美林大学内に設置された環境研究所が中心となって作成し、毎年刊行しています。同研究所は、学内教員の研究組織として2008年度から活動を開始し、研究活動と並ぶ取り組みとして、エコキャンパス活動や、環境・エネルギー問題に関連する学外向けの公開イベント等を行ってきました。環境報告書は、そのエコキャンパス活動の一環として作成しているものです。

桜美林大学では、エネルギー消費量や廃棄物発生量等の環境負荷要因の削減について、全学的に取り組んできています。しかしまだその成果が十分に現れているとは言えない状況であるとみています。2016年度からごみ分別方法の変更に着手し、2017年度から本格実施したものの、まだ分別の徹底にまでは至っていない現状があります。この点については、2018年度版の報告書で

詳細に記載する予定です。また、再生可能エネルギーの導入についても、新たな取り組みが必要な段階になっています。

また今年度も、学生編集委員が本報告書の作成に活躍してくれました。本報告書は最初の発行時から、広報面での効果に加えて、教育効果や人材育成効果も担っており、この方針は今後も継続・強化していきたいと考えております。

末筆となりまして恐縮ですが、本報告書の作成にご支援・ご協力をいただいた学外の皆様方、さらに学内の関係各位に対して、深く御礼を申し上げます。また、もし何かお気づきの点がありましたら、是非ご意見をお寄せいただけますようお願い申し上げます。

2017年10月

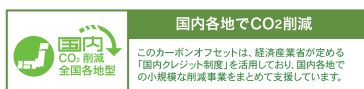
桜美林大学環境研究所長 片谷教孝

J. F. Oberlin University

表紙の写真：大気環境ステーション



大気環境ステーションは、理科学館屋上にあります。2008年4月より、気温、相対湿度、風向・風速、気圧、降水量、日照時間、直達日射量、全天日射量、紫外線A領域、紫外線B領域を観測しています。また、大気汚染項目として、窒素酸化物(NO、NO₂)、浮遊粒子状物質(SPM)、オゾン(O₃)を24時間連続測定しています。



2017年10月

編集・発行：桜美林大学環境研究所
〒194-0294 東京都町田市常盤町3758

<http://www.obirin.ac.jp>

この環境報告書へのご意見をお寄せください
kanken@obirin.ac.jp

この報告書は、FSC®認定紙とNON-VOCインキ、水なし印刷を使い、日本印刷産業連合認定「グリーンプリンティング工場」で作りました。

製作に伴い1部あたり168gのCO₂を排出しましたが、国内クレジットを用いて、その全量をカーボンオフセットしています。

リサイクル適正 (A) この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。